

Kプロジェクト

vol.32

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

「運動がつくる視覚イメージ」

人間は、視野を狭くしてでも立体視を優先し、頭や首の運動で視野を確保するというのは、視野の確保に止まらない……こういったことを前号で述べました。もう少し、このことに触れてみます。

頭、首、胴体の動きで見えない方向を見ようとすると、この時に首を動かすだけでも視野に変化が生まれますが、同時に筋肉からの情報が脳に伝えられ、視覚情報と密接につながっていくこととなります。

視覚情報は、

身体に直接触れたりするものではなく、何かが体の動きの中に組み込



まれるといった形で、脳の中で立体的、なおかつ身近なものとして印象づけられることとなります。これが知性の発達と密接につながっていきます。

人間の思考は、ある種の視覚的イメージと関係していますが、同じイメージでも、さらに「動きの感覚」ともつながっているかどうかが大変重要なこととなります。知性豊かな思考は、何がしかの感覚イメージの豊かさに関係していますが、それは単純なことから始まります。

例えば、階段があつて登ろうとする時、いとも簡単に登れるわけですが、これは階段とは関係のない過去に経験した、周りを見渡し視野を確保するという行為を通じて自分の頭の中で、どのように足を踏み出し、どのリズムで、どんな間隔で歩幅を取ったら良いのかをイメージすることができるところです。

このような視野の確保のための運動の経験から、やがて目の前の積木、お皿、鉛筆……など、物をいじるといった経験もイメージの発達に大きく関係していくこととなります。そこでもう一度、「定位反応」に立ち返って、このことを考えてみることにしましょう。

問合せ先／スポーツ推進課
プロジェクトK・スポーツ推進係
57・4850



乳児シリーズ vol.3

赤ちゃんが見る“人の顔”

赤ちゃんにとって、人の顔を見ることは非常に重要な意味があります。正確に言えば、表情を見ることであり、その表情に伴う話し声を聴くことです。ビデオやテレビによる映像とは異なり、直接、顔を見ることは、その背景に“景色”があり、語りかけられれば、その口元から声が発せられることを感じるのがポイントです。確かに、ビデオを見ている時、表情を見て音声を聞くと、その口元から声が出ていると感じることでしょう。ただし、これは、大人の感覚です。当然その人の声だということで、大人は脳の中で本人の声であると理解するわけです。むしろ「思い込む」と言った方が正しいでしょう。仮に、ビデオの映像と音声をずらして視聴すると、その口元からではなく別のところから声が出ているような気がします。若い女性が話している映像を、男性の低い声で合成して聴かされると、やはり別のところで誰かの声がしているように感じます。

赤ちゃんは、顔を見る、表情を見る、声を聴く……とい

う行動から次第に感情の起伏を少しずつ学んでいくこととなります。これは、いろいろな物体を見ている時とは異なった反応です。「いない、いないバアー！」は、赤ちゃんをあやす時の定番ですね。赤ちゃんの近くで大人たちが会話をしている、大きな声を出したり、笑ったりすると、赤ちゃんは、必ずと言っていいほど、大人達の「顔」を覗こうとします。決して、手や足を見ようとはしません。顔を見て、その人の声を聴くことは、赤ちゃんにとって「認知」の力を得る大切な経験となり、ここから多くのことを学んでいくこととなります。赤ちゃん、しっかり顔を見合わせましょう。そこには、さらに意外なことも含まれています。

